

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵『八まんの本地』の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 針本, 正行, 太田, 敦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000679

國學院大學図書館所蔵『八まんの本地』の解題と翻刻

針本 正行
太田 敦子

はじめに

國學院大學図書館には、江戸時代に制作されたと思量される三種の『八幡縁起絵巻』が収蔵されている。一つは、『八まんの本地』二軸（略号「國本1」）、二つは、『八幡御縁起』二軸（略号「國本2」）、三つは、『八幡縁起』二軸（略号「國本3」）である。^①『八幡縁起絵巻』の諸本の問題は、松本隆信氏、宮次男氏らにより、甲類、乙類に大きく二分類されている。^②本稿では、國學院大學図書館所蔵『八まんの本地』の全文翻刻をふまえて、「國本1」、「國本2」、「國本3」、および榊原家所蔵『八幡の本地』（略号「榊原本」^③）、菅田八幡宮所蔵『神功皇后縁起』（略号「菅田本」^④）の本文と対校することにより、國學院大學図書館所蔵の三種の『八幡縁起絵巻』の本文系統を確認したい。また、國學院大學図書館に所蔵されている『八幡縁起絵巻』三種の挿絵の構図の比較、國學院大學図書館所蔵本の詞書の書写者の特定、などの問題についての検証も通して、國學院大學図書館所蔵『八まんの本地』の特徴を明らかにしたい。

なお、『八まんの本地』の翻刻にあたっては太田敦子氏の協力を得た。

【書誌】

全二軸。表紙は布地牡丹唐草文様（原裝）、料紙は鳥の子。紙高は、縦三十三・〇糎、長さ、上巻九七三・七七糎、下巻九七一・四糎。挿絵は、上巻六図、下巻六図。箱書に墨書で「御軸物 二」とある。（貴三八八四・五）

一、『八まんの本地』（國本1）の本文

現在、乙類本と仮定されている「國本1」・「國本2」・「國本3」、及び乙類系統本二種のそれぞれの冒頭本文を校合することにより、「國本1」・「國本2」・「國本3」の本文系統を確認し、その上で、「國本1」と「國本2」の巻末本文の分析もした上で、『八まんの本地』（國本1）の本文の特徴について述べてみたい。

（二）冒頭本文に見る本文系統

國學院大學図書館所蔵『八まんの本地』（略号「國1」）の冒頭本文と、國學院大學図書館所蔵『八幡御縁起』（「國本2」・『八幡縁起』（「國本3」）、榊原家所蔵『八幡の本地』（「榊原本」）、誉田八幡宮所蔵『神功皇后縁起』（「誉田本」）の冒頭本文とを対校することにより、國本1、2、3の本文系統について確認したい。

①

- 國本1 それ我てうあきつしまとよあしはらの中・津國・と申はむかし天神七代地神五代つかう十二代はみな神・の御世にて
 國本2 それ我朝・あきつしまとよあしはら・なかつくに、・むかし天神七代地神五代以上・十二代はみなかみのみよなり
 國本3 夫・我朝・秋・津嶋・豊・葦・原・・中・津國・と申は昔・天神七代地神五代都合・十二代はみな神・の御代にて

- 榊原本
それ我てうあきつしまとよあしはらの中・津國・と申はむかし天神七代地神五代つかう十二代はみな神・の御世にて
譽田本
夫・我朝・秋・津嶋・豊・葦・原・中・津國・と申は昔・天神七代地神五代都合・十二代は皆・神・の御代にて
- ②
- 國本1
．．．あるしたりきこくとふねうにして壽命數千萬歳なりしかるに神・代をはりて人わうの御代となりかのさいしよ
國本2
．．．．．
國本3
天下の主・たりき國・土豊饒・にして壽命數千萬歳なり然．．．に神・代をはりて人皇・の御代となる彼・最・初・
榊原本
．．．あるしたりきこくとふねうにして壽命數千萬歳なり然．．．に神・代おはりて人わうの御代となるかのさいしよ
譽田本
．．．主・たり・國・土豊饒・にして壽命數千萬歳也・然．．．に神の世牟・て人皇・の御代となる彼・最・初・
- ③
- 國本1
．神武天皇と申たてまつるはすなはち地神第五のおはり．うかやふきあはせずのみことの第二の．わうじ也・神武天・皇・
國本2
．．．．．かの地神第五の．神彦波瀲武鸕鷀草葺不合（ひこなきさたけうかやふきはせず）・みことの第二の．御・子．神武てんわう
國本3
を神武天皇と申．．．すなはち地神第五のをはり．鸕鷀草葺・不合．尊．の第二の．御・子也・神武天・皇・
榊原本
．神武天皇と申奉．．．るはすなはち地神第五のおはり．うかやふきあへ．すのみことの第二の．皇・子なり神武天・皇・
譽田本
を神武天皇と申．．．即．．．地神第五の終．．．鸕鷀草葺・不合．尊．の第二・若・御・子なり神武天・皇・
- ④
- 國本1
より．十六代の御すへおうしん天・わうと申はいまの八幡大弁・の御事・なり御父・は．．．．．ちうあいてんわうの御宇
國本2
（と申たてまつるは人王代はしめなり帝よりこのかたにんわう）
．．．十六代の御すゑ應・神・てんわうと申はいまの八幡大菩薩の御ことなり御父．．．．．仲・哀・てんわうの御宇

- 國本3 より第十六代の御末・應・神・天・皇・と申は今・の八幡大菩薩の御事・也・御父をは仲哀天皇と申・・仲・哀・天・皇・の御宇
 榊原本 より・十六代の御末・おうしん天・わうと申は今・の八幡大菩薩の御事・なり御父・は・・・・・ちうあいてんわうの御宇
 誉田本 より第十六代の御末・應・神・天・皇・と申は今・の八幡大菩薩の御事・也・御父をは仲哀天皇・申仲・哀・天・皇・御宇
- ⑤
- 國本1 二年みつとの酉・の年・にあたりてしんらくくより数万・のくんひやうせめ・来たつて日・本・をうちとらんとすしかるに
 國本2 二年みつとのとり・・・・・しんらくくよりいてきのくんひやうきおひきたつてほんてうをうちとらんとす・・・・・
 國本3 二年癸・・・酉・歳・にあたりて新・羅國・より数万・の軍・兵・せめ・来・て日・本・を討・取らむとす然間・・
 榊原本 二年みつとの酉・のとしにあたりてしんらくくより数万・のくんひやうせめ・来たつて日・本・をうちとらんとすしかるに
 誉田本 二年癸・・・酉・歳・にあたりて新・羅國・より数万・の軍・兵・攻・來り・日・本・を討・とらんとす然間・・
- ⑥
- 國本1 天わうみつから五万余人の官・軍・を・・・あいたかへてなかとの国とよらの宮にしていこくのけうそくをふせかしめ給ふ
 國本2 *以下本文が他本と異なるので本節末尾に翻刻を示す。
 國本3 天皇・みつから五万余人の官・軍・を・・相・したかへて長・門・國豊・浦・宮にして異國・の凶・賊・を禦・かしめ給
 榊原本 天わうみつから五万余人のくわんくんを・・あひしたかへて長・門の国とよらの宮にして異國・のけうそくをふせかしめ給
 誉田本 天皇・みつから五万余人の官・軍・を前後に相・したかへて長・門・國豊・浦・宮にして異國・の凶・賊・を拒・かしめ給
- ⑦
- 國本1 このとき異國よりちんりんといふふしきのものはあかくかしらは八つにしてかたちはきしんのごとくなるかこく雲・にせう
 國本3 此・時・異國より塵・輪・といふ不思議の者・色はあかく頭・・は八・にしてかたち・鬼神・のごとくなり・黒・雲・に乗・

- 榊原本 この時・いこくよりちんりんといふふしきのものはあかくかしらは八つにしてかたちはきしんのことくなるかこくうんにせう
- 誉田本 此・時・天國・より塵・輪・と云・不思議の者・色はあかく頭・は八・にして形・・鬼神・のことくなるか黒・雲・に乗・
- ⑧
- 國本1 して日ほんにつく人民をとりころす事・かすをしらす天わう・あへのたかまるおなくすけまるに仰せてそうもんをかためさす
- 國本3 ・て日本・につく人民をとりころすこと教・をしらす天皇・安陪・高・丸・同・・介・丸・に仰・て惣・門・をかためさす
- 榊原本 じて日本・につく人民をとりころす事・かすをしらす天わうのあべのたかまるおなくすけ丸・に仰せてそうもんをかためさす
- 誉田本 ・て日本・につく人民を取・ころすこと數・しらす天皇・安部・高・丸・・・介・丸・に仰・て惣・門・をかためさせ
- ⑨
- 國本1 ちんりんきたらはいそきそうし申へし人臣のちからにてたやすくうつ事あるへからす我・十せんのうちからをもつてかのものを
- 國本3 塵・輪・来・らはいそき奏・・申へし人臣の力・・にてたやすくうつ事あるへからすわれ十善・の力・・をもちて彼・者・を
- 榊原本 ちんりん来・らはいそきそうし申へし人臣のちからにてたやすくうつ事有・へからす我・十せんのうちからをもつてかのものを
- 誉田本 塵・輪・きたらは急・・奏・・申へし人臣の力・・にてたやすく打・事あるへからす我・十善・の力・・をも・て彼・者・を
- ⑩
- 國本1 かうふくせしめんとおほせらるすなはち・二人弓矢をたいしてもんの両方にしゆこするに第六日にあたりてちんりん黒・雲に
- 國本3 降・伏・せしめむと仰・・らるすなはち彼二人弓箭を帯・して門・の両方を守・護するに第六日にあたりて塵・輪・黒・雲に
- 榊原本 かうふくせしめんとおほせらるすなはち・二人弓・をたいして門・の両方にしゆこするに第六日にあたりてちんりんくろ雲に
- 誉田本 降・伏・せしめむと仰合・らる即・・・彼二人弓箭を帯・して門・の両方を守・護するに第六日に当・りて塵・輪・黒・雲に

⑪

國本1 のりて出来るたか丸武内・大臣をもつて此よしをぞうするにみかと御弓をとり矢をはけて・・・はなちたまへはかのちんりんか

國本3 乗して出来る高・丸武内・大臣をもちて此よしを奏・するに御門・御弓をとり矢をはきて塵輪をいさせ給・へは・・・塵・輪・か

榊原本 のりて出来るたか丸武内・大臣をもつて此よしをぞうするにみかと御弓をとり矢をはけて・・・はなち給・へはかのちんりんか

誉田本 乗して出来る高・丸武内の大臣をも・て此よしを奏・するに御門・御弓をとり矢をはきて・・・射させ給・へハ・・・塵・輪・の

⑫

國本1 くひたちまちにいきられてかしらと身と二・つになりてそおちにける

國本3 頸・たちまちに射きられて頭・・・になりて・落・にけり

榊原本 くひたちまちにいきられてかしらと身とふたつになりてそおちにける

誉田本 頸・忽・・・にいきられて頭・・・と身と二・・・に成・て・落・にけり

⑥*以降から第一図までの「國本2」の本文

天皇さちよくしてのたまはく皇后のみやくわいにんのわうしもし男子たはりうわうのむこになすへしもし女子
 たらは龍王のきさきになすへしと云々しかるに仲哀てんわう九年かのへたつ二月六日つくしかしみの宮において
 ほとなくほうぎよおはんぬその、ち神功皇后しんらはくさいかうらいをうちしたかへんかためにちんせいへお
 もむき給しときらせいもんをいてさせ給とてきせいせられけるはねかはくはてんたうわれにちからをそへてかの
 いこくのてきをほろほしてわか國をあんおむならしめ給へと申給ひしかはいつくよりともなく白髪はくはつの老翁らうおうひとり
 きたれりくほうこうとふてのたまはくいかなるおひ人なるらんとおい人こたへていはく君しんらはくさいとうを

うちしたかへんとおほしめした、せ給ふおきなも御とも申て御ちからにもなりたてまつらんとてまいりて候なりと申ときくはうこう御こゝろのうちにおほしめすやうかのおい人のていさしもわかちからになるへしとおほえすおほしめしなからしましたへんけのものにてもやあるらむとてめしくしてちんせいへくたらせ給ふ

以上から、國本1と3は、榊原本、菅田本と同系統の本文であり、松本氏、宮氏により指摘された乙類本となり、國本2は、別系統の本文であり、いわゆる甲類本ということになる。

(二)「國本1」・「國本2」の主題

次に、國學院大學図書館所蔵『八まんの本地』（「國本1」）の末尾本文と、國學院大學図書館所蔵『八幡御縁起』（「國本2」）の末尾本文の内容を比較することにより、末尾本文から窺われる、國本1と2の主題の指向性について確認したい。

「國本1」の末尾本文

清和天わうの御宇ちやうくはん十八年七月十五日の夜半にひそかに行けうにしめし給ふやうなんちにともなひてわうしやうちかくせんさしてこくわうをしゆこし奉るへしとのたまひければおしやういつれのとこにましますへきと申わうしやうのみなみ男山をさして御さいしよとすへきむねををしへ給ふすなはち行けうの上衣にみたる三尊あらはれ給ふ和尚すなはちかの山にしやたんをかまへてこれをあかめ奉り行けう心中におもひけるはこの山ひろしといへともつれのへんにかましますへきとなけきをなすところにはし水の邊に三本のさか木生へたり和尚すなはちこれをもつて御ようかうのみきんとさためけりをよそ我てうにそうひやうしんおほしといへともこと

にいこくをかうふくのせいやくをたて、てうていをまほり万民をめぐみ給ふ事ひとへに大ほさつの神りよにありた、し御たくせんの中鉄丸てつてつぐわんをもつてしよくすとも心穢人の物をはうけしとしめしたまひけるもし正ちきの心をさきとしてしんきやうをいたさん人はまつたいといふともりしやうと、こほりあるへからすほさつしんくをさきとして三所のせいやくをあふき二世のしよくわんをとくへきとの事也

國本1の末尾本文の概要は次のとおりである。

(ア) 醍醐天皇の貞観十八年七月十五日の夜半に、八幡大菩薩が、国王を守護するので、王城の南に我が身を勧請するようにと、行教に託宣した。

(イ) 八幡大菩薩が、行教の上衣に「阿弥陀三尊」として顕現した。

(ウ) 行教は、石清水の辺で三本の榊が生えていた場所に、宮を造営し、この榊を影向の御木とした。

(エ) 託宣に、朝廷を守り、万民を救済し、正直の心をすすめ、大菩薩の信心を先とすれば末代まで「利生」が得られるとあり、縁起の語りが終焉する。

すなわち、國本1の末尾には、八幡の本地を語ることにより、石清水八幡宮の勧請譚であり、八幡信仰をすすめる主題の指向性が醸成されているといえる。

「國本2」の末尾本文

その、ちゑんきのみかとの御ときひとりの大申しましたいらの朝臣ときひらと申す人ださいふの大貳となりてくたらせ給ふにはかにちよくによりてきやうへのほり給ぬこの大臣かの八まん三しよにくはんをたて申させ給ふ

ねかはくはわれいま一たひたさいの大二となさせ給へもしこのねかひしやうしゆあらはかならず御てんをあらためたてまつらんといのり申七日こもりてきやうへのほらせ給ひてのちほとなく又大貳となりてくたり給ふしかるによの中うちまきれてやありけん大ほさつの御りしやう又かみのめくみといふ事わすれたり女ていのみかとの御くはんおんしと申てらの三千人のほうしのうちゆい一法師と申僧のめいの七さいの女人あり大ほさつわれにつき給ふとてそらへとひあかる事一ちやうして大二殿のまします御前へとひゆきて御たくせんありなんちおほえずやきやうに侍りしにわか御てんにまいりくはんを申つるによりまた大二となれりしかるにしんりよをわすれてこのくはんをとげざるそと御たくせんありこれは多んき廿一年のことなり大二殿おとろきてまことにさる事候ほんぶの身はよのなかのことにまきれこのことおほえず候しんりよをわすれたてまつる事は候はずとてやかて御てんをつくりかへ候へきと申またいづれのところにかあかめたてまつるへきと申給しときかさねて御たくせんありこれよりいぬいのすみにしらゝのはまありわれ天下をまもりはしめしときかいちやうゑのはこをうつみてしるしの松をたてしゆへにかのところがはこさきとなつけそのまつのもとにやつのはたふりしゆへに八まん大ほさつとゆはひたてまつるなりわか御てんのはうをはいぬいのすみにむかへてくけんにつくり石すへのうへにはいこくのてきのなをかくへしこれはいこくかうふくのためなりうちのらうほかのらうを二ちんにつくりてふきあはせにふき二かいのらうもんをたてようちのらうはしよしんしゆゑのためほかのらうはしゆきやうのものゝため二かいのらうもんはわういのおとろへにんみんなちからおとろへたらんときさためてかてききたらんときわれらうもんにのほりててきをふせくへしたこくよりはわかくにの人さうろんにはまかさしにんけんのくるしみはわかくるしみなりわれことすみかなししやうちきの人のかうべをすみかとすくろかねのゆをはうくるともふせんのものゝせをはうけしと御ちかひありたゝしわれかならず五八月にかのところにやうかうをたれていこくのせつかいのものをけう

やうするなりと御たくせんありかのたいらのときひらはこさきへまいりて御たくせんにまかせてほうてんろうも
ん玉をみがきしゆるくはいらうはきんくをちりはめ又かみとみのこほりをやしろのりやうによせそうしてやし
ろさうゑいよりのち三百よ年になりぬ

(中略)

かのはこさきの松の葉あかみてかれんとし候しをはこさきのしゆきやうあへのもりすけこの松をみて申やうこの
まつはかつらのかゝりたるゆへなりかつらをたちすつへきなりとてかつらをきりければ松やかてかれけりその、
ち松かれなから三年たをれす宮人このまつをきりてねをほりてへついとこのといふところのをけりその、ちあらは
なる松のねより七八寸はかりなるまつみもおひたりみや人これを見てねをほりのけてむかしのしるしの松のも
とのあとにうへたりかのみつのもとかれてのちたみの松をうへかへたれともさらにおひつきていまに四五丈の松
にてむかしの松のやうにさかさなる松にてたちたりまことにかゝるれいけんしゆしようのふしきのところなり
とおほしめしてはうしやうゑをはおこなはせ給ふにこそわうしによしはりうわうのむすめのはらにおはしますか
みとあらはれ給ふときわかみやとのとてあらはれてましますされはわか宮とのをは夢にもおさなきちこにみたて
まつるなりたけうちほんぢあみたいなほの國かみのみやたけうちほんしやなりかのかみのみやにみやまより
その山の中にたけうちそくたいた、しくしていり給しより後かへり給はすたつねたてまつるにやまのなかにたけ
有やつにふたをかくそのふたのなにはほうさうひくあにことなる人ならんやあみたすなはちわか身是なり

國本2の末尾本文の前半の概要は次のとおりである。

(ア) 醍醐天皇の御代に、平時平が大宰大貳に就任したが、すぐに都に上京することになった。

- (イ) 時平は、大弔として復官できるようにと、八幡大菩薩に願ひ、その代わりに社殿を改築すると約束する。
- (ウ) 延喜二十一年、しかし、時平は、八幡の「神慮を忘れ」て、社殿を造営しなかった。
- (エ) 八幡が、観音寺の僧侶の姪の七歳の女子に憑き、「なんちおほえすやきやうに侍りしにわか御てんにまいりくはんを申つるによりまた大二となれりしかるにしんりよをわすれてこのくはんをとげさる」と託宣する。
- (オ) 時平は、「これよりいぬいのすみにしら、のはまありわれ天下をまもりはしめしときかいちやうゑのはこをうつみてしるしの松をたてしゆへにかのころをはこさきとなつけそのまつのもとにやつのはたふりしゆへに八まん大ほさつとゆはひたてまつるなり」との託宣に従つて、戒定恵の箱が埋めてある「しるしの松」の場所を「筥崎」と名付けて、八幡大菩薩として「齋ひ」奉じた。
- (カ) 八幡は、「にんげんのくるしみはわかくるしみなりわれことすみかなししやうちきの人のかうべをすみかとするくろかねのゆをはうくるともふせんのもの、せをはうけしと御ちかひありた、しわれかならず五八月にかのころにやうかうをたれていこくのせつかいのものをけうやうするなり」と、「不善の者」を否定し、正直の心を持つ者を棲み処として、八幡大菩薩の信心を説く。
- (キ) この縁起の語りが、「やしろさうゑいよりのち三百よ年になりぬ」と、宮造営から三百年後のこととして終わる。⁽⁵⁾すなわち、石清水八幡宮の勧請譚にあった、「神慮」・「神の恵」を忘れ、「正直の心」を持たなかつた平時平の行状を述べた上で、「しるしの松」のある筥崎宮の社殿を造営するという、筥崎宮創建譚が語られる。
- 國本2の末尾本文の後半の概要は次のとおりである。
- (ア) 執行「安部のもりすけ」が、「松」に生えかかる「葛」を切り、「松」を枯らす。
- (イ) 三年後も「松」は倒れずも、「宮人」が切り、「へついと」に置く。

(ウ) その後、「あらはなる松のねより七八寸はかりなるまつみもとおひたりみや人これをみてねをほりのけてむかしおしるしの松のものとあとにうへたり」とした。

(エ) さらに、「松をうへかへたれともさらにおひつきていまに四五丈の松にてむかしの松のやうにさかさまなる松にてたちたりまことにかゝるれいけんしゆしようのふしきのところなりとおほしめしてはうしやうゑをおこなはせ給ふにこそわうしによしはりうわうのむすめのはらにおはしますかみとあらはれ給ふときわかみやとのとてあらはれてましま」と、「さかさの松」の奇瑞譚、「放生会」の由緒を語る。とくに「皇子女子は龍王の娘の腹におはします」の詞章は、國本2の冒頭本文「皇后のみやくわいにんのわうしもし男子たらはりうわうのむこになすへしもし女子たらは龍王のきさきになすへし」に承応するものである。

(オ) 最後に、「たけうちのほんぢあみたいなのは國かみのみやたけうちのほんしやなり」と、「武内宿禰の本地」を語って終焉する。

すなわち、國本2の末尾には、宮崎宮の創建、「しるしの松」の奇瑞を語り、あらためて、八幡大菩薩の「神慮」「神の恵み」を世にあまねく知らしめる、縁起語りが醸成されているといえる。

二、『八まんの本地』（國本1）の挿絵の構図

國學院大學図書館に所蔵されている『八まんの本地』（國本1）の挿絵の構図の特徴について、挿絵の構図に相当する本文を指摘した上で、『八幡御縁起』（國本2）、『八幡縁起』（國本3）の挿絵の構図との相違を分析することにより確認したい。

上巻

図一 仲哀天皇、黒雲に乗る塵輪を射る

図一は、長さ四八・一糶で、仲哀天皇が、新羅国から黒雲に乗った塵輪を射る場面である。本文「このとき異國よりちんりんといふふしきのいろはあかくかしらは八つにしてかたちはきしんのことくなるかこく雲にせうして日ほんにつく人民をとりころす事かすをしらす天わうあへのかまるおなくすけまるに仰せてそうもんをかためさすちんりんきたらはいそきそうし申へし人臣のちからにてたやすくつ事あるへからす我十せんのちからをもつてかのものかをかうふくせしめんとおほせらるすなはち二人弓矢をたいしてもんの両方にしゆこするに策六日にあたりてちんりん黒雲にのりて出来るたか丸武内大臣をもつて此よしをそうするにみかど御弓をとり矢をはけてはなちたまへはかちんりんかくひたちまちにいきられてかしらと身と二つになりてそおちにける」に相当する。画面右上に黒雲に乗る塵輪が銚を持ち、頭部に角が二本あり、顔の左右に鬼頭が描かれている。左画面には仲哀天皇が弓をつがえている。國本2は、当該本文も当該図もない。國本3は、七九・五糶の長大図で、惣門の上に黒雲に乗って、二本の角に、八つの鬼頭を持つ塵輪が描かれている。左画面には、仲哀天皇が邸の御簾の中で、弓をつがえる準備をしている。挿絵の構図からも、國本1と國本3は同系統であり、國本2は別系統であることを示している。なお、國本2の第一図は、長さが一四九・五糶の長大図で、神功皇后が三韓征伐に向かう場面となっていて、右画面に宮殿、中央画面に護衛の軍勢が、左画面に神功皇后の乗る輿が、行列の先頭には、杖をつく老翁、櫛を持つ者などが描かれている。國本3は、第二図として、長さ一三三・四糶の長大図で、國本2と同じ構図であるものの、先頭に杖をつく老翁、櫛を持つ者、その後ろに銚を持つ者が描かれている。

図二 沖の方より出現した牛、神功皇后の乗る船を襲う

図二は、長さ四九・二糎で、沖の方より出てきた牛が神功皇后の乗る船を襲う場面である。本文「くはうこうびんこのともにつかせ給ふときたけ十丈ばかりなるうしおきのかたより出来りてのらせたまへる御舟をそんせんとす其ときらうわうかのうしの二つの角をとつて海中へなけたればひとつのしまとなつていまにありうしまと、いふこれなり文字にはうしまろはしとかきたり」に相当する。右画面には、住吉明神が船のへさきで沖の方から出現した牛を迎えとる様が、船の奥には神功皇后が武士の装いで見守る様が描かれている。左画面に、沖の方から出現した牛が描かれている。國本2では、長さ九九・四糎の長大図で、右画面に武装した神功皇后の乗る船が、左画面に神功皇后とは別の船に乗る老翁（住吉明神）と、海に出現した牛が描かれている。國本3は第三図として、長さ七六・九糎の長大図で、牛を迎えとる老翁が描かれている。神功皇后の姿は見えない。國本1、2、3の図様について、該当本文の後半「其ときらうわうかのうしの二つの角をとつて海中へなけたればひとつのしまとなつていまにありうしまと、いふこれなり文字にはうしまろはしとかきたり」をふまえて、翁が神功皇后の乗る船を襲う牛を海に投げ入れた場面を描いたとも解せる。なお、牛窓伝説地を、國本1、3は「備後」とし、國本2は「備前」とする。本文系統の問題でもあり、「八幡菩薩御縁起」、「八幡宮縁起」の生成過程の問題でもある。

図三 老翁、あしやの津で、十丈の岩を射通す

図三は、長さ四九・〇糎で、老翁があしやの津で十丈の岩を射通す場面である。本文「又あしやの津といふ所につかせ給ふときこのおきな弓矢をとりいたしこくうにむかつてはなちけるを御らんすればゆくゑもなき大なる岩の十ちやうはかりさし出たるをよつひきいければものにもあらずいとをしたりくはうこうをはしめ奉りぐぶのくはんくんとうきいのおもひをなすまことに人りきのをよふ所にあらず」に相当する。画面中央に船のへさきで弓をつがえる老翁

が、その船の奥に武装した神功皇后が、左画面に海中に立つ十丈の岩が描かれている。國本2は、長さ五十・〇糎で、全体の構図は、國本1の第三図と同じであるが、神功皇后は描かれず、弓を射た後の老翁の様が描かれている。國本3では、長さ五九・六糎の第五図で、右画面に弓を射た老翁が、左画面には海上に浮かぶ島に十丈の岩が、岩の左に射通された矢が描かれている。なお、國本3は第四図として、当該図の前に、長さ七九・四糎の長大図として、老翁が潮干によりとどまっていた船を沖へ押し出す様が描かれ、船の中には戦仕立ての神功皇后が座している様が描かれている。

図（欠落か） 磯良、細男の舞に導かれて海上に現れる

直前の詞書（第九紙）の末尾が散らし書きになっているので、この後に、磯良が細男の舞に導かれて海上に顕現した図があったのではないかと思量される。該当する本文は、「すなはちかい中にふたひをかまへてくふの人々おんかくをそうするにらう人このまひをまひすまし侍りければくたんのいそらこのまひをあひしてまひのすかたになりしやうゑをたいしは、きをしてくひにつ、みをかけたり海中にひさしくひさしくすみたるゆへにかきひしなといふものかほにひしと取つきてあまりに見くるしかりければしやうゑの袖をときてかほにおほひしてかめのかうのりてふたひちかくいてくるさてこそこのまひをはいまの世までも布をおもてにたれ侍りけり」と仮定される。國本2は、長さ九八・八糎の長大図で、当該図があり、右画面に管絃を催す楽人たちが、中央の画面に海中に仕立られた舞台上で細男舞を舞う老翁が、左画面には、音楽に誘われて海中より龍頭を持つ舟に乗って出てきた磯良が描かれている。磯良は、片足を上げて舞姿となり、首からは鼓をさげ、顔には浄衣が垂れている。國本3は第六図として、長さ七九・七糎の長大図で、國本2と同一の構図を持ち、右画面に楽人たちが、中央画面に海にせり出して作られた舞台で右足を上げて細男の舞を舞う老翁が、左画面には、海中より亀に乗って出てきた磯良が描かれている。磯良は、首

から鼓をさげて、顔には浄衣が垂れている。國本2では、龍頭を舟首にもつ舟に乗る磯良に対して、國本3では亀に乗る磯良の様が描かれている。

図四 磯良、龍宮にある早珠・満珠を神功皇后へ捧ぐ

図四は、長さ四九・二厘で、磯良が龍宮にある早珠・満珠を神功皇后へ捧げるために海上に顕現した場面である。本文「かの海中に石となりて今に待るとなんさてくはうこうらうおうにおほせられるはくたんの玉の事かのわらはおほせふくむへしとの給へはおきな申さくいとそらはいかの中にあんなひにて具ふし侍へし御ししや人をさためらるへしと申ければそれもらう人はからひ申へしとちよくちやうありければさらはくはうこうの御いもうと豊姫を御つかひとしてくたんの玉をめさるへしとておきなちよくちやうのおもむきいそらにおほせふくめけるはなんちしらすや日本のあるししんくうくはうこうの御ほんゐをとけんかためにしんらはくさいとうをせめしたかへんとしたまふ日本國にありなから玉命をいかてそむきたてまつるへきはやくせんしにしたかつてちうせつをいたすへしなかんつくりうくうに二つの玉あり此玉をかりて人力をついやさすして異こくをせいはつすへしとよひめにあひくしたてまつりてりうくうにおもむきてちよくせんのみねをりうわうに申へしとありしかはいそらとよひめをくしたてまつりてりうくうにおもむきけりりうくうにゆきむかひてかんしゆまんしゆの二つの玉をかりえて次の日さうたんにきさんしけり」に相当する。右画面に老翁と神功皇后の乗る船が、正面上部に軍兵の乗る船が、中央左手前には、亀に乗り、覆面をした磯良が宝珠を捧げ持ち、その左に海に棲む妖物などが描かれている。國本2は、長さ九九・一厘の長大図で、右画面に、磯良を待ち受ける日本軍の兵が、中央画面には椅子に座り弓を持つ神功皇后が、その左には海岸で弓を持つ老翁が、左画面には、龍頭の舟に乗り、宝珠を捧げ持ち龍宮から戻ってきた磯良が描かれている。磯良の顔には浄衣が垂れている。國本3は第七図として、長さ七九・〇厘の長大図で、國本2と同じ構成を持ち、右画面に、磯良を待ち受ける

日本軍の兵が、中央画面には右手に杓（か）を持って立つ神功皇后が、その左には海岸で弓を持つ老翁が、左画面には、亀に乗り、宝珠を捧げ持ち龍宮から戻ってきた磯良が描かれている。磯良の顔には浄衣が垂れている。この図も、國本2は磯良が龍頭を舟首にもつ舟に乗り、國本1と3では、磯良は亀に乗っている。磯良が「亀」に乗っているのか、「龍首の舟」に乗っているのか興味深い課題である。⁶⁾

図五 神功皇后、戦仕立てに鎧を引き合わせる

図五は、長さ四九・五糎で、神功皇后が、筑前の国鹿嶋から男子の姿となり神々とともに出発する場面である。本文「くはうこうもたちまちなんしのすかたとなり給ひ御たけ九しやく二寸御は一寸五分ひかり有みとりの御くしひむつらにとりからはにわけて御かふとをめし御手にたらしゆのまゆみ八めのかふら矢をとりそへて弓を御たらしといふことは此たらしゆよりはしまれりとなんからあやおとしのよろひをたてまつる御うみ月の事なれば御ちふさの大きにして御よろひのひきあはせあはさりければかうら大明神くさすりをきりて御わきのしたにつけ給ふ今の世にわきたてといふはこれよりはしまりける」に相当する。右画面の船の輿の奥に、妊娠の身で「乳房大」なので、戦仕立てに鎧を引き合わせた神功皇后が、同じ船のへさきには、「日の丸」の図様の扇を持ち鎧を着て佩刀する老翁が描かれている。國本2、國本3には、該当図はない。

図六 異国軍、早珠・満珠の靈力にて、海に溺れる

図六は、長さ九二・五糎の長大図で、日本軍と異国軍とが海上で合戦し、高良大明神が海に投じた早珠・満珠の靈力にて異国軍が破れて海に溺れている場面である。本文「このとき高良大明神白色の玉をうみへいれたまふ大かいたちまちにひてろく地のことし異國のけうとよろこひてことくく舟よりおりたつてくはうこうをうちとりたてまつらんとす日本のふねにはりうしん下にありてしゆこするゆへに水ひる事なしさて又あをき色のことく大海となりてきくん

こと／＼くしほ水におほれて魚のことししする物かすをしらすさらになふへきやうなかりけり」に相当する。右画面には、輿をしつらえた船の舳先で弓を構える高良大明神（か）、輿の中には戦仕立ての神功皇后が描かれている。左画面には、宝珠の靈力にて海に溺れる異国軍が描かれている。本文に「日本船には竜神下にありて守護するゆえに」とあるので、異国軍が龍に襲われている図とも解せる。國本2は、長さ一四七・五糎の長大図で、右画面には、甲冑姿の神功皇后を乗せた日本軍が描かれている。皇后の乗る船の舳先で宝珠が、高良大明神（か）により海に投げられようとしている。中央画面には、上部で海に溺れて二匹の龍に襲われる異国軍が、下部に弓を構え日本軍と戦う異国軍が描かれている。左画面には、舳先に鬼面を持つ楯をしつらえ、船尾で太鼓を叩く兵士が乗る船、同じく鬼面を持つ楯をしつらえ大将の輿（居室か）を船上に構える船が描かれている。國本3は第八図として、長さ一七二・〇糎の長大図で、右画面には、三艘の日本軍が描かれ、右画面端には甲冑姿の神功皇后を乗せた船が描かれている。皇后の乗る船の舳先で兵士（か）により宝珠が海に投げられようとしている。中央画面には、上部で海に溺れて二匹の龍に襲われる異国軍が、下部に弓を構え日本軍と戦う異国軍が描かれている。左画面には、舳先に鬼面を持つ楯をしつらえ、船尾で太鼓を叩く兵士が乗る船、同じく鬼面を持つ楯をしつらえ大将の輿（居室か）を船上に構える船が描かれている。

下巻

図一 神功皇后、弓の弭で岩に銘文を書く

図一は、長さ四九・〇糎で、馬に乗り甲冑姿をした神功皇后が、「新羅國の大王は日本の犬なり」という銘文を盤石に書き付ける場面である。本文「くはうこうしんらの地につき給ひすなはちはんしやくのおもてに弓のはつにてしんらくの大わうは日本のいぬなりといふめいをかきつけて御ほこを國のわうくうのもんせんにたてをきて御きてうありいまの世にいぬをものといふ事はかの國の人民を犬にかたとりてきくんをいるひやうしなり日本のくわんくんひき

しりそきてのち末代までの國のはちとて火をもつてかの石の文やきうしなはんとすれともいよ／＼あさやかになりていまにありと申つたへたり」に相当する。右画面には、馬上で右手に持った弓の弭で盤石に銘文を書きつける神功皇后と、それに伺候する六人の武士が描かれている。左画面には、邸の門前で異国の国王ら三人が控えている。本文にある「御ほこを國のわう宮の門前にたて」るの絵は描かれていない。國本2は、九九・四糧の長大図で、右画面は國本1と同一の構図を持つものの、新羅國の屋敷の門は描かれていない。左画面には、新羅國の屋敷の前で、国王（か）と臣下二人が描かれている。國本3は、長さ九九・四糧の長大図で、右画面には、國本1・2と異なり、馬に乗らずに、甲冑姿をした神功皇后が、右手に弓を持ち、末弭で「新羅國の大王は日本の犬なり」という銘文を盤石に書き付けている様が描かれている。左画面には、國本2と同一の構図を持つものの、新羅國の屋敷の前で、国王（か）、臣下二人に加えて、従者二人が控えている様が描かれている。

図二 神功皇后、鵜羽根で葺いた産屋で応神天皇を出産する

図二は、長さ四八・五糧で、筑前国に帰着した神功皇后が、鵜羽根で葺かれた邸で応神天皇を出産した場面である。本文「くわうこうはちくせんの國にくわんしやうくし給ひてのち十日と申にうのはをもつてうぶ屋をつくり槐木をさかさまにたて、とりつかせ給ひてわうしをうみたまつり給ふかの木やかておひつきいまにありかのところをうみのみやとなつたてまつり御たんしやうは十二月十四日辛卯たんじやうゑといふ神事おこなはる、事このゆへなり」に相当する。右画面には、邸の簀子に四人の公卿が控えている様が、庭には祝儀性を象徴する松が描かれている。左画面には、鵜羽根で葺かれた邸の部屋の御簾の奥に白い衣を着た神功皇后、簀の子に誕生した応神天皇を抱く女房と侍女が控えている様が描かれている。なお、「槐木をさかさまにたて、とりつかせ給ひてわうしをうみたまつり給ふ」図は描かれていない。國本2には上巻の最終図に該当する図があり、長さ五〇・〇糧で、鳥居を門とする神域の中に

鶺鴒で葺いた六角の産屋が描かれている。國本3は、國本2と同じ構図を持ち、長さ五九・三糎で、鳥居を門とする神域の中に鶺鴒根で葺いた四角の産屋が描かれている。

図三 ①勅使、宇佐馬城峰に下向し、岩上の金色の鷹をあがめる

②八流の幡、菅崎のしるしの松のもとに降る

図三は、長さ九二・〇糎の長大図で、異時同図法の構図を持つ。前半は、仁徳天皇の勅使が宇佐馬城峰に下向し、岩上の金色の鷹をあがめる場面であり、後半は、八流の幡が菅崎のしるしの松のもとに降る場面である。本文「すなはちかの山のいた、きに三つの石となりてその石よりこんじきのひかりをはなち其ひかりわうしやうをさすこれによりてにとく天わうにちよくしかの山によちのほりてみればこんじきの鷹とけんし給へりちよくし山のふもとにてほうてんをつくりあかめ給ふなり」に相当する。右画面上部に、岩上に金色の鷹、それをあがめる勅使と、四人の従者の様が描かれている。左後半部は、八流の幡が、菅崎のしるしの松のもとに降る場面である。本文「うさ八まん大ほさつとかうしたてまつる事ははこさきのしるしの松のふもとに空より八りうのはたふるあかはた四なかれしらはた四なかれなりすなはちしやたんをつくりこれを大ほさつと名つけたてまつるこれすなはち八正ちきろのしめしと三有のくかいをすくひ給ふひようしなり」に相当する。左画面には、菅崎宮の社殿と、社殿の階段右に四本の白い幡、階段左に赤い四本の幡が降りている。また、中央画面には、「三有のくかい」を鎮める駿の松が垣の内に描かれている。國本2は、長さ一四八・五糎の長大図で、異時同図法の構図を持つ。右画面には、仁徳天皇の勅使と、三つの岩の中央に応神天皇が金色の鷹として顕現する様が描かれている。左画面には、天空から逆さの松が、その右に赤幡四、左に白幡四が降り、それぞれの手前に社殿が描かれている。「逆さの松」の図は、國本2の「しかれともちくせん」の國本2とみ七こほりうちにかすやにしのかうと申ところにてかいちやう系のはこをうつみてしるしのまつをたて給へり

かのしるしと申は松のえたをおてさかさまにたて給へるゆへかのところをはこさきのしるしの松と申なりかのまつこ
んけんのしはさなりしかはおひつきてさかさまなるまつにていまのよまでも侍るなり」の本文に相当するものである。
國本3は、長さ七九〇・糶の長大図で、異時同図法の構図を持つ。右画面には、仁徳天皇の勅使が、また、応神天皇
が三つの岩の中央に金色の鷹として顕現する様が描かれている。左画面の真ん中に松が、その右に赤幡四、左に白幡
四が降り、それぞれの手前に社殿が描かれている。國本2と異なり「逆さの松」ではない。

図四 応神天皇、三歳の童子として竹の葉に顕現する

図四は、長さ四八・一糶で、応神天皇（誉田天皇）が三歳の童子として竹の葉に顕現した場面である。本文「われ
三年のあいたきうししたてまつる事御そうかうた、人にてましまさゝるによりて正御躰をはいけんせんかため也もし
神明にてましまさはねかはくは我まへにあらはれ給へとねんころにきせいしたてまつりしかはたちまちに三さいのせ
うとけんし竹の葉にのりてしめされていはく我は日ほんこく主人わう十六代誉田のてんわうなりわれをはこ、くれい
けんありきしんつう大しさいほうほさつといふなりにく／＼と／＼と／＼にあとをたれあらはるゝ事久しとの給ひてま
ことに國の御せいやくよしやにかはりてちんりにまします」に相当する。画面中央には、幣帛を捧げ持つ大神比義
が描かれ、画面左には、竹の葉に乗り顕現した三才の童子の託宣する様が描かれている。國本2は、長さ九七・五糶
の長大図で、異時同図法の構図として、右画面に鍛冶をする翁（八幡大菩薩）と幣帛を捧げ跪く大神比義が描かれて
いる。左画面には、竹の葉の上に赤い布を腰に巻いた小児が、その前で幣帛を左手に持つ大神比義が描かれて
いる。國本3は、長さ七八・六糶の長大図で、異時同図法の構図として、右画面に鍛冶をする翁（八幡大菩薩）と跪く大神
比義が描かれている。左画面には、竹の葉の上に赤い布を腰に巻いた小児が、その前で幣帛を持つ大神比義が描かれ
ている。

図五 鹿に導かれた和氣清麻呂、宇佐八幡宮社殿の前で蛇に腿をなめられる

図五は、長さ四八・八糎で、和氣清麻呂が鹿に導かれて宇佐八幡宮に参詣したところ、社殿の前で蛇に腿をなめられる場面である。本文「しかるにせうとく天わうのゆけのたうきやうせんしにせんそあるへきむねわけのきよまろをちよくしとして宇佐の宮に申させ給ひければ大くわんをなすしかるにかゝるひれいを聞事更にわかほんゐにあらすことはをいたすゆへにこそかゝるひたうの事をもきけいまよりのちちよくしなれはとて返事する事あるへからすとのたまひてきよ丸きさんして此よしをそうもんするにみかとしんりよのゆるし給はさる事をは、かりとおほしめしてせんそはなかりけれどもきよまるあしく申たりければこそ御ゆるしなければとてかの二のあしをきりてうつほふねにのせてなかさる此ふね宇佐のはまによりければかのしゝきたりてきよ丸をのせてうさの宮のなんろうにいたりしかはこれをひとへに大ほさつの御めくみとおほしめしてかのしゝよりておりて御てんちかくまいりてなみたをなかしければ御てんのうちよりやことなき御こゑにて ゆきつゝも来つゝみれともいさきよき 人のこゝろをわれわすれめや きよまるこれ聞いていよゝしんきやうをいたすところにはうてんより五色の小蛇はひ出てきよまるかもゝをねふるにもとのことくあし二つおへ出てけり」に相当する。画面右奥に宇佐の浜が、右画面手前には、清麻呂を導いてきた鹿が、中央には拜殿内で座す清麻呂が、また社殿の階段から降りてくる蛇が描かれている。國本2は、長さ九九・三糎の長大図で、異時同図法の構図をとり、右画面には、和氣清麻呂が乗ってきた「うつほ舟」が、中央には鹿に乗る清麻呂が描かれている。左画面には、宇佐八幡宮の社殿の前で、社殿の御簾の中から階段を降りてきて清麻呂の腿を舐める龍（蛇）が描かれている。國本3は、長さ一一七・〇糎の長大図で、異時同図法の構図をとり、右画面には、海に流罪となった和氣清麻呂の乗ってきた「うつほ舟」と猪に乗る和氣清麻呂が、中央画面には、宇佐八幡宮の社殿の前で跪き、社殿からきざしをつたい降りる「五色の小蛇」が和氣清麻呂の腿に這いまとわりつく様が描かれ、清麻呂の

足が見える。さらに左画面に宇佐八幡宮の三重塔を拜む行教和尚の様が描かれている。和氣清麻呂が乗る「しし」が、「鹿」であるのか、「猪」であるのか、興味深い課題である。⁽⁷⁾ ちなみに、國本1は「かのし、」であり、國本2は「し」であり、國本3は「猪」である。

図六 行教和尚、八幡大菩薩を宇佐八幡宮から石清水八幡宮へ勧請する

図六は、長さ四九・五糎で、行教和尚により八幡大菩薩が宇佐八幡宮から石清水八幡宮へと勧請された場面である。本文「十八年七月十五日の夜半にひそかた行けうにしめし給ふやうなんちにともなひてわうしやうちかくちんさしてこくわうをしゆこし奉るへしとのたまひければおしやういつれのところにましますへきと申わうしやうのみなみ男山をさして御さいしよとすへきむねをしへ給ふすなはち行けうの上衣にみたの三尊あらはれ給ふ和尚すなはちかの山にしやたんをかまへてこれをあかめ奉り行けう心中におもひけるはこの山ひろしといへともつれのへんにかましますへきとなけきをなすところにはし水の辺に三本のさか木生へたり和尚すなはちこれをもつて御ようかうのみきりと御さためけり」に相当する。中央画面には、宇佐八幡宮（石清水八幡宮か）に向かう行教和尚や、参詣する人々が描かれている。左画面には、石清水八幡宮（宇佐八幡宮か）と思われる社殿に二人の者が拜む様子が描かれている。國本2は、長さ九九・〇糎の長大図で、右画面には、三重塔などの伽藍をかまえる宇佐八幡宮と思われる様子が描かれている。左画面には、石清水八幡宮とおぼしき社殿とその前で拜む行教和尚の様子が描かれている。國本3は、長さ一一八・三糎の長大図で、右画面には、宇佐八幡宮の社殿と思われる三重塔が描かれ、左画面には、石清水八幡宮と思われる社殿に向かって拜む行教和尚が描かれている。⁽⁸⁾

三、『八まんの本地』（國本1）の詞書書写者

『八まんの本地』と同時代に制作されたとされる絵入り物語が國學院大學図書館に複数収蔵されている。『舟のゐとく』⁽⁹⁾・『呉越絵』⁽¹⁰⁾・『張良物語』⁽¹¹⁾などである。これらは、江戸時代前期（寛文・延宝期）に制作された物語絵巻と推定され、詞書書写者も同一と思われる。参考図に示したように、物語冒頭の書き出しの詞書の「それ」をはじめとして、『國』・「人」・「乃」・「代」・「あ」の崩し方が同一である⁽¹²⁾。江戸時代の寛文・延宝期に制作された、『八まんの本地』をはじめ、『舟のゐとく』・『呉越絵』・『張良物語』などの詞書の書写者は同一であり、絵巻の制作には同じ絵双紙屋が関与していたと仮定されるのである。これは、原初の『八幡大菩薩縁起絵巻』、『八幡宮縁起絵巻』などの『八幡縁起絵巻』の成立の問題ではなく、『八まんの本地』（「國本1」）の制作された江戸時代前期における『八幡縁起絵巻』の享受のそれとして考察した。

註

- (1) すでに、國學院大學図書館が所蔵する三種の『八幡の本地』の書誌についての報告がある（『國學院大學創立百三十周年記念 國學院大學古典籍解題 中世散文文学篇』「三〇五」八幡の本地絵巻」五九二・二頁、「三〇四」八幡御縁起絵巻」五九〇・一頁、「三〇三」八幡縁起絵巻」五八八・九頁、平成二十六年二月 國學院大學）。
- 本稿では、「三〇五」八幡の本地絵巻」を「國本1」、「三〇四」八幡御縁起絵巻」を「國本2」、「三〇三」八幡縁起絵巻」を「國本3」とした。「國本2」の書誌は、紙高は三三・〇厘、上巻の長さ九九〇厘、挿絵は七図、下巻の長さ一一三九・七厘、挿絵は六図（貴一六〇・一二）。「國本3」の書誌は、紙高は三三・〇厘、上巻の長さ一四二五・三厘、挿絵は八図、下巻の長さ一一八一・二厘、挿絵は五図（貴一一九〇・一）。なお、当該解題において、「國本1」・「國本2」・「國本3」の諸本分類について三点とも乙類としているが、本稿では、「國本1」・「國本3」は乙類系統本、「國本2」は甲類系統本として論じた。

(2) 松本隆信氏により、「八幡縁起絵巻」の諸本は、甲類・乙類の二系統に分類できると指摘されている（増訂室町時代物語類現存本簡明目錄）奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』一一三・四頁 三省堂 一九八二年）。また、宮次男氏は、松本氏のご論を受けて、「八幡縁起」として現在流布絵巻は数多いが、その詞章と絵の表現を相互に比較検討するとおおよそ二種類に分類することができる。その分類によって、中世制作の現存作品をあげると次の通りである。

甲類 「八幡大菩薩御縁起」と内題が銘記されるもの。

サンフランシスコ・アジア美術館蔵一卷 康応元年（一三八九）奥書。

和歌山 鞆淵八幡神社蔵一卷。

大阪 逸翁美術館蔵二巻。

赤木文庫旧蔵衣奈八幡宮縁起二巻 応永九年（一四〇二）奥書。

国文学研究資料館蔵一卷 文正元年（一四六六）奥書。

兵庫 浜天神社旧蔵一卷 大栄七年（一五二七）奥書。

奈良 天理図書館蔵二巻 享禄四年（一五三一）奥書。

大分 八幡奈多宮蔵二巻 永禄三年（一五六〇）奥書。

乙類 内題はなく八幡宮縁起と称されるもの。

京都 石清水八幡宮旧蔵二巻 永享五年（一四三三）奥書。但し昭和二年消失。

大阪 誉田八幡宮蔵神功皇后縁起二巻 永享五年奥書。

奈良 東大寺蔵二巻 天文四年（一五三五）奥書「絵師 宗軒 詞 寺務公順」とあり。

大分 柞原八幡宮蔵由原八幡宮縁起二巻「絵 藤原光茂 詞 二品（尊朝）と奥書にあり。親王」（以下略）と、論究されている（「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起（上）」『美術研究』三三三 昭和六〇年九月）。近年では、甲類本として、黒田彰・坪井直子・筒井大祐氏「東原本八幡大菩薩御縁起（上巻）」影印、翻刻（「京都国文」十七号 平成二二年二月）、乙類本として、黒田彰・坪井直子・筒井大祐氏「榊原本八幡の本地（上・下）」影印、翻刻（「文学部論集」第九五・九六号 二〇一一年三月・二〇一二年三月 佛教大学文学部）が報告されている。また、田中水萌氏が、消失本を含めて、四九本の諸本を確認し、分類されている（「八幡縁起絵巻諸本の所在とその相違点」『美術史論集 十五』（二〇一五年 神戸大学美

術史研究会)。

- (3) 「榎原本 八幡の本地」の本文は、前掲注2 黒田彰・坪井直子・筒井大祐氏「文学部論集」第九五・九六号)による。
- (4) 「誉田本」の本文は、『神功皇后縁起』(誉田八幡宮資料 『神道大系 神社編六 河内・和泉・摂津国』六八〜七五頁 昭和五十六年三月)による。
- (5) 宮次男氏は、この記述について、「宝社すなわち箱崎宮の社殿は、同段詞書に、延喜二十一年(九二二)に託宣があつて社殿を造営するに至つたと述べられているから、それより三百年後の西暦一二二二年以降、若干年のうちに成立したと考えることができるのである」(「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起(下)」『美術研究』三三六号 昭和六一年八月)と、甲類の成立時期の資料として扱っている。また、同氏は、乙類本の成立時期については、「なお、『八幡愚童訓』は、文中に、「九十四代ノ朝廷」という記事があるので、花園天皇の御治世中、すなわち、延慶元年(一三〇八)―文保二年(一三二八)の間に成立したと考えられており、これが乙類本成立の上限と考えられるのである」(前掲『宮氏ご論』と論究されている)。また、近年では、田中水萌氏が、甲類本、乙類本の成立論をまとめている(前掲注2 田中氏ご論中の注(37)に詳述されている)。論者は、國本1・2・3の当該絵巻の制作時期を推定することはできるが、『八幡の本地』『八幡大菩薩御縁起』『八幡宮縁起』などの縁起絵巻の原典(出典文献)及びそれぞれの成立時期には踏み込まない立場を取る。
- (6) 田中水萌氏は、当該場面図について、「甲類の多くは龍首の付いた船に乗って二珠の付いた枝を捧げ持った女性か童子を描くの対し、乙類は亀の甲に乗り、顔を白布で隠して鼓を首から下げた男性が描かれている。乙類で描かれる磯童は大善寺玉垂宮蔵「玉垂宮縁起絵」、高良大社蔵「高良大社縁起」等の掛幅本と類似する。乙類中石清水享保本のみ、亀の甲に乗って頭に鼓を乗せた女性もしくは童子が描かれている」(前掲注2 田中氏ご論)と論究されている。また、甲類本と乙類本の構図の相違について、「甲類諸本は従来の八幡縁起絵巻を参考にしながらもそれぞれの絵師による工夫が見られる」(前掲注2 田中氏ご論)とも指摘されている。個々の「八幡縁起絵巻」の制作過程における、本文系統と絵の構図の相違との関係については今後の課題としたい。なお、画面中の「磯良」を「豊姫」とも解せるが、後日の課題としたい。
- (7) 田中水萌氏は、当該場面図について、「甲類では社殿に向かう僧侶と鹿に乗る清麻呂を描いているのに対して、東大寺本、柞原本では画面右手に猪に乗った清麻呂が、左手に社殿から出てきた小さな蛇と向かい合う清麻呂が描かれている」(前掲

注2 田中氏ご論」と論究されている。

(8) 田中水萌氏は、当該場面図について、「甲類諸本は画面右手から塔と山々があり、左手に宇佐神宮とその前に座す行教という構図で描かれる。(略)乙類の誉田本には、貞観年中の宇佐神宮の景観と石清水八幡宮の境内が描かれている」(前掲注2 田中氏ご論)と論究されている。

(9) 國學院大學図書館所蔵『舟のみとく』の詞書の書写者について指摘したことがある(針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『舟のみとく』の解題と翻刻」『國學院大學校史・学術資産研究』第二号 平成二十二年三月)。

(10) 國學院大學図書館所蔵『呉越絵』の詞書の書写者について指摘したことがある(針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『呉越絵』の解題と翻刻」『國學院大學校史・学術資産研究』第三号 平成二十三年三月)。

(11) 『張良物語』詞書の書写者として、國學院大學図書館に所蔵されている『舟のみとく』・『呉越絵』・『咸陽宮』・『八まんの本地』・『清重』との類似性について指摘したことがある(針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『張良物語』の解題と翻刻」國學院大學校史・学術資産研究第八号 平成二十八年三月)。

(12) なお、國學院大學図書館に所蔵されている『竹取物語絵巻』の中で、武田祐吉博士旧蔵本とハイド旧蔵本の詞書書写者が『呉越絵』・『舟のみとく』・『張良物語』と同一であるとの石川透氏の説がある(石川透氏「國學院大學図書館所蔵の奈良絵本・絵巻」(針本正行編『物語絵の世界』二〇一〇年)。國學院大學図書館所蔵『竹取物語絵巻』の中で武田祐吉博士旧蔵本の翻刻・解題は、針本正行「竹取物語絵巻の本文」(『國學院大學大学院紀要―文学研究科―』三八、二〇〇七年三月)で、ハイド旧蔵本及び小型本の『竹取物語絵巻』翻刻・解題は、二〇〇七・二〇〇九年度科学研究費基盤研究B報告書『物語絵巻の本文とその享受に関する総合的研究―國學院大學所蔵本を中心として』(代表者針本正行)で報告した。また、石川氏は、埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵『太平記絵巻』、CBL所蔵『依藤太物語』・『舞の本絵巻』、慶應義塾大学斯道文庫所蔵『竹取物語絵巻』なども詞書書写者が同じであるとされている(石川透氏「第四編 太平記絵巻奈良絵本・絵巻類 第三章 太平記絵巻・絵本の制作」『奈良絵本・絵巻の生成』三弥井書店 二〇〇三年)。

*國學院大學図書館蔵の古典籍の閲覧・調査にあたっては、古山幹はじめ館員の方々に多大なご配慮をいただいた。
ここに御礼申し上げます。

『八まんの本地』（國本一）の翻刻本文
上卷

それ我てうあきつしまとよあしはらの中津國と申はむかし天神七代地神五代つかう十二代はみな神の御世にてあるしたりきこくとふねうにして寿命数千万歳なりしかるに神代をはりて人わうの御代となりかのさいしよ神武天皇と申たてまつるはすなはち地神第五のおはりうかやふきあはせずのみことの第二のわうじ也神武天皇より十六代の御すへおうしん天わうと申はいまの八幡大菩薩の御事なり御父はちうあいてんわうの御宇二年みつのとの酉とちの年にあたりてしんらくより数万のくんひやうせめ来たつて日本をうちとらんとすしかるに天わう

みつから五万余人の官軍をあいしたかへてなかとの國とよらの宮にしていこくのけうそくをふせかしめ給ふこのとき異國よりちんりんといふふしきのものいろはあかくかしらは八つにしてかたちはきしんのことくなるかこく雲にせうして日ほんにつく人民をとりころす事かすをしらす天わうあへのたかまるおなしくすけまるに仰せてそうもんをかためさすちんりんきたらはいそきそうし申へし人臣のちからにてたやすくうつ事あるへからす我十せんのうちからをもつてかのものをかうふくせしめんとおほせらるすなはち二人弓矢をたいしてもんの両方にしゆこするに第六日にあたりてちんりん黒雲にのりて出来るたか丸武内大臣をもつて此よしをそうするに

みかと御弓をとり矢をはけてはな
ちたまへはかの

ちんりんか

くひたちまち

に

いきられて

かしらと身と

二つに

なりてそ

おちに

ける

図一 仲哀天皇、黒雲に乗る塵輪を射る

かゝるところになにとかしたりけんなかれ
矢まいりてきよくたいにあやうくみえさせ
給ひければきさきしんくうくほうこうを
ちかつけて仰られけるは我がいかにもなり

なはくほうこう大將くんとしていこくを
うちたいらけ給ふへし御はらにやとりた
まふはわうしにてましませはたんしやうの
のち御くらゐにつけたてまつり給ふへし
とておなしき九年二月六日御とし五
十一にてつくしの宮におゐてつゐに
ほうきよおはんぬくほうこうすなはちせん
くわうの御ゆいせきにまかせてしんらは
くさいをせめんかために数千きのくんひ
やうあひくしていこくにおもむき給ふてい
とを出させ給ふに一人のはくはつたる老
人出来りてくほうこうの御まへにかしこま
まるくほうこうはいかなるものそと御た
つねありければかのらうおうこたへて申
さくわかきみかたしけなくもいこくをうち
したかへむかたためにおほしめした、せた
まふこのおきなも御ともつかまつりて御
ちからになりまいらせんと申けるくほう

こう御こゝろのうちにおほしめしける
 は此らう人のていさしてちからになるへし
 ともおほえすさりながらへんけのものに
 てやあらんとおほしめしてめしくし
 てちんせいへおもむかせ給ふくはうこうびん
 このともにつかせ給ふときたけ十丈ばかり
 なるうしおきのかたより出来りて
 のらせたまへる御舟をそんせんとす其
 ときらうわうかのうしの二つの角を
 とつて海中へなけたればひとつのしまと
 なつていまにあり

うしまと、いふ

これなり

文字には

うしまろはしと

かき

たり

図二 老翁（住吉明神）、牛を海に投げ入れる

それよりしてくはうこう此らうしんた、
 人にあらずとたのもしきことにおほし
 めして御身ちかくめしてなに事も
 おほせあはせられけり其後しかの関
 の上大江かさきといふところにつかせ
 給ふおりふししほひのしふんにて御
 舟かよふへきやうもなしそのとき此おき
 なた、一人してくはうこうのめされた
 る御ふねともをおきなかへみなをし出し
 ける人々ふしきのおもひをなしけり
 又あしやの津といふ所につかせ給ふとき
 このおきな弓矢をとりいたしこくう
 にむかつてはなちけるを御らんすれ
 はゆくゑもなき大なる岩の十ちやう
 はかりさし出たるをよつひきいければ
 ものにもあらずいとをしたりくはうこう

をはしめ奉りぐぶのくはんくんとうき
いのおもひをなすまことに人りきのを

よふ所にあらす

図三 老翁、あしやの津で、十丈の岩を射通す

その、ちかしゐのはまといふところに
てくはうこう此らうおうをめしてお
ほせられけるは異國へわたりつくと云
ともかのてきともをたやすくうちした
かへへきやうなしいかにせんとのため
ければおきな申やう是よりにしにし
かのしまと申所にあとへのいそらといふ
ものあり海中に久しくすみてあ
むなひしやにて侍ければ此ものをめし
てりうくうしやうにつかはしてかんしゆ
まんしゆといふ二つの玉をりうわうに
からせ給へこの二つの玉たにも候は、しん

らはくさいとうをせめしたかへ給はん
事いとやすきことなりと申ければ
くはうこうくたむのいそらをはなにとし
てかめすへきとおほせられければおき
な申さくこのわらはせいなうと申まひ
をあいし侍るこのまひをは又ならまひ
とも申なりかい中にふたひをかまへて
此まひをまはせられはくたんのわらはさた
めて来るへしと申くはうこう此まひを
はたれ人かまふへきとのたまひければ
そのときらう人さらはおきなまひ侍らん
といふにすなはちかい中にふたひをか
まへてくふの人々おんかくをそうするに
らう人このまひをまひすまし侍りけ
れはくたんのいそらこのまひをあひし
てまひのすかたになりしやうをたいし
は、きをしてくひにつ、みをかけた
り海中にひさしくすみたるゆへに

かきひしなといふものかほにひしと取
つきてあまりに見くるしかりければ
しやうゑの袖をときてかほにおほひし
てかめのかうにのりてふたひちかく
いてくるさてこそこのまひをはいま
の世までも布を

おもてに

たれ侍り

けり

図(欠落)磯良、細男の舞に導かれて海上に現れる(?)

かの海中に石となりていまに侍る
となんさてくはうこうらうおうにお
ほせられけるはくたんの玉の事かの
わらはにおほせふくむへしとの給へは
おきな申さくいそらはかい中のあんなひ
にて具ふし侍へし御ししや人をさた

めらるへしと申ければそれもう人は
からひ申へしとちよくちやうありければ
さらはくはうこうの御いもうと豊姫を
御つかひとしくたんの玉をめさるへし
とておきなちよくちやうのおもむきい
そらにおほせふくめけるはなんちしら
すや日本のあるししんくうくはうこう
の御ほんゐをとけんかためにしんら
はくさいとうをせめしたかへむとした
まふ日本國にありながら玉命をいかて
そむきたてまつるへきはやくせんし
にしたかつてちうせつをいたすへし
なかんつくりうくうに二つの玉あり此
玉をかりて人力をついやさすして異
こくをせいはずすへしとよひめにあひ
くしたてまつりてりうくうにおも
むきてちよくせんむねをりうわう
に申へしとありしかはいそらとよひめ

をくしたてまつりてりうくうにお
 もむきけりりうくうにゆきむかひ
 てかんしゆまんしゆの二つの玉をかり
 えて次の日さうたんにきさんしけ
 りくはうこうな、めならす御かん有
 てみことのりして御ふねつくるへし
 とありしかは三百人化人にはかに出き
 たりてなかとの國ふな木山に入てさい
 もくをいたしてふせんの國宇佐のこほ
 りにして四十八そこのふねをつくり
 いたすこれすなはち八まん大ほさつは
 本地あみた如来にておはしませは六
 八てう世のひくわんをへうし給ふなるへし
 かのらう人はすみよし大明神にておはし
 ます此御神と申は地神第五のおはり
 うかやふきあはせすのみことの御事
 なり神武天わうよりこのかたの百わうは
 こと／＼かの御へやうゑひなり我しこ

の御めくみふかきによりて人りんのか
 たちとけんしてくはうこうにつきた
 てまつりいこくをせめし

たかへ給ふこそ

めてた

けれ

図四 磯良、旱珠・満珠を神功皇后に捧ぐ

いそらと申はちくせんの國しかの嶋の明
 神の御事なりひたちの國にてはかし
 まの大明神これみな一躰ふんしん同たい
 のいみやうにてましますかその時すは
 あつたみしまかうら以下の神たち三
 百七十五人四十八そこのふねに同しすか
 たにけんし給ふそうしてその勢一千
 三百七十五人四十八そこのふねにのり
 つれてちくせんの國かの嶋よりこさい

たす大將くんには高良大明神なりくはう

こうもたちまちになんしのすかた

となり給ひ御たけ九しやく二寸御はは

一寸五分ひかり有みとりの御くしひ

むつらにとりからはにわけて御かふと

をめし御手にたらしゆのまゆみ八めの

かふら矢をとりそへて弓を御たらし

といふことは此たらしゆよりはしま

れりとなんからあやおとしのよろひ

をたてまつる御うみ月の事なれは

御ちふさの大きにして御よろひのひ

きあはせあはさりければかうら大明

神くさすりをきりて御わきのした

につけ給ふ

今の世にわき

たてといふは

これより

はし

まり

ける

図五 神功皇后、戦仕立てに鎧を引き合わせる

か、りけるところにくはうこう御さん

のけいてきさせたまひ御はらしきり

になやましくおほしければつしま

のくに、て御舟よりおり白石にて

御はらをひやしつ、御はこしに石を

はさみ給ひわかほらみたてまつるところ

の御子日本のあるしとなり給は、

いま一月たいなひを出給ふへからすと

ねきことし給ひて又ふねにめされけり

さるほとにいこくのひやうせん十万八千

そうくんひやう四十九万六千余人のり

つれてせめきたるいこくのくんひやうは

大せいなれば日本のひやうせんをうんか

のことくとりこめて一とにうちこ

ろさんとすすなはちくはうこう高良大

明神をつかひとしてちよくせんのみね

をおほせければしんらかうらいとうのこく

わう大しんでうひしてかんく日本は

かしこき國なるによつて女人を大将と

するなりあなとりてふかくすへからす

とてせめかゝる

このとき

高良大明神

白色の玉

をうみへ

いれ

た

まふ

図六 異国軍兵、早珠・満珠の靈力にて、海に溺れる

大かいたちまちにろく地のことし異

國のけうとよるこひてことく舟

よりおりたつてくはうこうをうち

とりたてまつらんとす日本のふねに

はりうしん下にありてしゆこするゆへ

に水ひる事なしさて又あをき色

の玉をなぐる海の水みなきりてもと

のことく大海となりてきくんことく

くしほ水におほれて魚のことし

しする物

かすをしらす

さらに

かなふへき

やう

なかり

けり

下巻

さてしんらはくさいかうらいのこくわう

大臣みなかうをこふてわれら日本のいぬと

なりてしゆこすへし毎年みつきもの

をそなへてまつたくけたいすへからすと

てせいこんをたて、引しりそきけり

さるほとに異國のけうとことく

きふくしててきしんのなすもの一

人もなかりけりくはうこうしんらの

地につき給ひすなはちはんしやくの

おもてに弓のはつにてしんらくの

大わうは日本のいぬなりといふめいを

かきつけて御ほこを國のわうくうの

もんせんにたてをきて御きてうあ

りいまの世にいぬをもといふ事は

かの國の人民を犬にかたとりてきくん

をいるひやうしなり日本のくわんくんひ

きしりそきてのち末代までの國のは

ちとて火をもつてかの石の文やきうし

なはんとすれともいよくあさやかに

なりていまにありと申つたへたりい

こくのかつせんにうちかつ事毎度の

事なれともまさしくてきこくきふ

くしてせいこんをのこす事此くわう

こうの御時のほかそのれひをきかす

いこくにおむもく

くんひやう

きうりにかへり

よろこひをなし

ほんこくに

と、まる人臣は

しゆくんを

えたる

いさみ

ありて

図一 神功皇后、弓の弭で岩に銘文を書く

さてかの二つの玉をはひせんの國さかの
 こほり河上の宮におさめをかれける
 となりかんしゆといふはいろしらくまん
 しゆといふは青いろの玉をのく長さ
 五寸はかりの玉なりくわうこういこくに
 おもむき給ひし時せんくわうの御躰
 御くわんに入てかしのはまにすへたて
 まつりをき御まほりとおほしめしける
 をくわんかうの後武内大臣してなかと
 の國とよらの宮におくりたてまつり
 それよりして河内の国長野山にうつし
 奉りて山陵をつき給ふくわうこうはちく
 せんの國にくわんしやうし給ひてのち
 十日と申にうのはをもつてうぶ屋を
 つくり槐木をさかさまにたて、とり
 つかせ給ひてわうしをうみたてまつり

給ふかの木やかておひつきいまにあり
 かのところをうみのみやとなつてたて
 まつり御たんしやうは

十二月十四日

辛卯

たんじやう

ゑといふ

神事

おこなはるゝ

事

このゆへ

なり

図二 皇后、鶺鴒羽根で葺いた産屋で応神天皇を出産する

次のとし二月にたけうちをしくねを
 わうしにあひともなひたてまつりてみ
 やこへのほせ給ふほとにかこさかのわうし

をしくまのわうし兄弟二人くわうこう
 の御はらにわうしいてき給へる事を
 そねみてつはものをあつめてひそかに
 まち給ふよし聞えしかはたけうちの
 しくねわうしをいたきたてまつりて
 なんかいよりきいのみなとにつき給ふ
 その、ちたけうちの大臣かの兄弟の
 わうしをついはつしかこさかをし
 くま兄弟の御子と申はちうあい天
 わうの御子大ほさつの御ためには御
 兄にてまします神功皇后はかいくわ
 てんわう五世の御まこ御年三十一と申
 十月二日ちうあいてんわうの御ゆいこん
 にまかせてつゐに

天子のくらゐに

いたり給ふ

図三 ①勅使、岩上の金色の鷹をあがめる

②八流の幡、宮崎のしるしの松のもとに降る

御治世六十九年御とし一百才と申せし
 四月十七日に大和の國たかいちのこほり
 磐余稚桜宮にしてほうきよをはんぬ
 のちには神とあらはれ給ふ八幡大菩薩
 三所のうちひかしのこせんと申はすな
 はち此御事也わうしは四歳にして
 くわうたいしにた、せたまひ御年七十
 一と申正月に皇后にかはりたてまつ
 り帝位にそなはり給ふすなはちおう
 しん天わうとかうしたてまつりちう
 あいてんわう第四の御子なり御治世
 四十一年きさき八人男女の御子十九人
 此御代にはしめて文字をかきいしやう
 はしまるとみえたり御とし百十一にし
 て大和の國たかいちのこほりかるしま

とよあきらの宮にてほうきよをはんぬ
 神にあらはれたまひて八まん大ほさつ
 とかうし奉るちくせんの國にまし〜
 七郡かうかすや西郷と申ところに
 ちやうゑのはこをうつししるしの松
 これなり其後又ふせんの國宇佐のこほ
 りましろのみねにてせきたいこんけん
 とあらはれ給ふこれすいしやくのはしめ
 なりすなはちかの山のいたゝきに
 三つの石となりてその石よりこん
 しきのひかりをはなちそのひかり
 わうしやうをさすこれによりてにん
 とく天わうにちよくしかの山によち
 のほりてみれはこんじきの鷹とけんし
 給へりちよくし山のふもとにてほうてん
 をつくりあかめ給ふなりうさ八まん大
 ほさつとかうしたてまつる事ははこ
 さきのしるしの松のふもとに空より

八りうのはたふるあかはた四なかれしら
 はた四なかれなりすなはちしやたんを
 つくりこれを大ほさつと名つけたてま
 つるこれすなはち八正ちきろのしめし
 と三有のくかいをすくひ給ふ

ひようしなり

図四 誉田天皇、三歳の童子として竹の葉に顕現する

人わう第三十代きんめい天わうの御宇
 十二年正月にはしめてしんたいをあら
 はし給ふすなはち豊前のくにうさのこほ
 りれんたいし山のふもとたにのおくに
 かちするおきななり太神ひきこれを
 みるにそのかたちかほはせきいにして
 た、人にあらずはかのひきろうきよ
 してきうしする事三年たちまち
 に五こくをたんししやうしんして御

へいをさ、けいのり申やうわれ三年の
 あいたきうししたてまつる事御そ
 かうた、人にてましまさ、るによ
 りて正御躰をはいけんせんかため也
 もし神明にてましまさはねかはくは
 我まへにあらはれ給へとねんころにき
 せいしたてまつりしかはたちまちに
 三さいのせうとけんし竹の葉にのりて
 しめされていはく我は日ほんこく主人わう
 十六代誉田のてんわうなりわれをはこ、
 くれいけんゐりきしんつう大しさいほう
 ほさつといふなりにくくところくく
 あとをたれあらはる、事久しとの給ひ
 てまことに國の御せいやくよしやにか
 はりてちんりんにましますされは御
 たくせんの中には人の國より我が國
 他の人より我が人と云御ことはあり
 わかくに、生をうけてむ人たれか大ほ

さつの御めくみをえさらんやむかしは
 六年に一度ちよくしを宇佐へたて、
 國のまつりことをさため給ふへきよし
 申されけるに

御てんより

御こゑを

いたし

たまひて

御返事

あり

けると

なり

図五 清麻呂、社殿の前で蛇に腿をなめられる

しかるにせうとく天わうのゆけのたう
 きやうせんしにせんそあるへきむねわけ
 のきよまろをちよくしとして宇佐の

宮に申させ給ひければ大くわんをなす
 しかるにかゝるひれいを聞事更にわか
 ほんるにあらすことはをいたすゆへに
 こそかゝるひたうの事もきけいま
 よりのちちよくしなればとて返事
 する事あるへからすとたまひてきよ
 丸きさんして此よしをそうもんするに
 みかとしんりよのゆるし給はさる事
 をはゝかりとおほしめしてせんそはな
 かりけれどもきよまるあしく申たり
 ければこそ御ゆるしなればとて
 かの二のあしをきりてうつほふねにの
 せてなかさる此ふね宇佐のはまにより
 ければかのしゝきたりてきよ丸をのせ
 てうさの宮のなんろうにいたりしかは
 これをひとへに大ほさつの御めくみと
 おほしめしてかのしゝよりておりて御
 てんちかくまいりてなみたをなかしけれ

は御てんのうちよりやことなき御こゑにて
 ゆきつゝも来つゝみれともいさきよき
 人のこゝろをわれわすれめや
 きよまるこれを聞いていよ／＼しんき
 やうをいたすところにほうてんより五
 色の小蛇はひ出てきよまるかもゝを
 ねふるにもとのことくあし二つおへ出
 てけりきよまるきいのあまりに一の
 からんをたてゝほうみをそなへたてま
 つりけんといふくわんをおこすところに
 なんちおとこ山にこんりうすへしと
 つけ給ひしかはやわた山のおくからん
 を立てみろくほさつをあんちしたて
 まつり足立寺となつけたり和氣の
 氏寺としていまに有となんちやうくわん
 のころ行けり和尚といふ人宇佐の宮
 に式千日さんろうして大ほんにやほつ
 け大せうきやうをしゆししんこんの

ほうみをさ、けたてまつる大ほさつ

此上人の

ほうみを

たつとみ

て

たくせん

して

のた

まはく

図六 行教、八幡大菩薩を宇佐から石清水に勧請する

得道已来不動法性示八正道垂権

迹皆得解脱苦衆生故号八幡大菩薩

和尚此文を得てすいきして御すいし

やくのたつとき事をおもふにかんるい

そてをひたす又大ほさつ此上人にはこ

さきの松のもとにかいちやうゑのはこを

うつみ給ふ事をしめし給ふおしやうす

なはちかしこにまふて、かの松のもと

にみかきをしめくらすこれよりし

てしるしの松といふ事はみな人しりたり

けり清和天わうの御宇ちやうくわん十八

年七月十五日の夜半にひそかに行

けうにしめし給ふやうなんちにもな

ひてわうしやうちかくせんさしてこく

わうをしゆこし奉るへしとのたまひ

ければおしやういつれのところにまし

ますへきと申わうしやうのみなみ男山

をさして御さいしよとすへきむねを

をしへ給ふすなはち行けうの三衣にみ

たの三尊あらはれ給ふ和尚すなはちか

の山にしやたんをかまへてこれをあか

め奉り行けう心中におもひけるは

この山ひろしといへともいつれのへんに

かましますへきとなけきをなすとこ

ろにいはし水の辺に三本のさか木

生へたり和尚すなはちこれをもつて

御ようかうのみきんと御さためけりをよ

そ我てうにそうひやうしんおほしと

いへともことにいこくをかうふくのせいやく

をたて、てうていをまほり万民を

めくみ給ふ事ひとへに大ほさつの神

りよにありた、し御たくせんの中

鉄丸てつぐわんをもつてしよくすとも心穢人の

物をはうけしとしめしたまひける

もし正ちきの心をさきとしてしん

きやうをいたさん人はまつたいといふとも

りしやうと、こほりあるへからすほさつ

しん／＼をさきとして三所のせいやく

をあふき二世のしよくわんをとくへきとの事也